

レコードで楽しむ

NEW YEAR CONCERT

本日の鑑賞曲

クレメンス・クラウス指揮

- 1 喜歌劇「こもり」序曲 ※1
- 2 ワルツ「ウィーンの森の物語」op.325 ※2
- 3 ピチカート・ポルカ ※2
- 4 ワルツ「わが人生は愛と喜び」op.263 ※2
- 5 かじ屋のポルカ op.269 ※3
- 6 歌劇「騎士パスマン」チャルダッシュ・バレエ ※3
- 7 常動曲 op.257 ※3

ヴィリー・ボスコフスキー指揮 以下すべて※4

- 8 爆発ポルカ op.43
- 9 アンネン・ポルカ op.117
- 10 ポルカ「うわ気心」op.319 <1975 年演奏>
- 11 ポルカ「狩り」op.373
- 12 ポルカ「うわ気心」op.319 <1979 年演奏>
- 13 ワルツ「美しく青きドナウ」op.314
- 14 ラデツキー行進曲 op.228

※鑑賞レコードの詳細は資料 6 ページをご覧ください

♪ ニューイヤー・コンサート

毎年1月1日にウィーン楽友協会大ホールにてウィーン・フィルハーモニー管弦楽団がシュトラウス一家の音楽を中心に演奏するコンサート。

1939年12月31日、ウィーン楽友協会大ホールでクレメンス・クラウスとウィーン・フィルによるシュトラウス一家の作品だけのコンサートが「特別コンサート」として開催されたのがはじまりとされる。ウィーン人の心の音楽であるシュトラウス作品だけのコンサートには、当時ナチス・ドイツによる併合下にあったオーストリアへの信条告白という意義もあったとされる(ウィーン・フィル web サイトより)。戦時中も変わらず開催され続け、1946年より「ニューイヤー・コンサート」の名で呼ばれるようになる。1959年にテレビによるライブ中継が始まり、より世界的なイベントとなった。クラウス、ボスコフスキー、マゼールの時代ののちは毎年異なる指揮者が招かれるようになり、その人選も話題となっている。

ニューイヤー・コンサート歴代指揮者

1939～1945	クレメンス・クラウス	2000	リッカルド・ムーティ
1946、1947	ヨゼフ・クリップス	2001	ニコラウス・アーノンクール
1948～1954	クレメンス・クラウス	2002	小澤征爾
1955～1979	ヴィリー・ボスコフスキー	2003	ニコラウス・アーノンクール
1980～1986	ローリン・マゼール	2004	リッカルド・ムーティ
1987	ヘルベルト・フォン・カラヤン	2005	ローリン・マゼール
1988	クラウディオ・アバド	2006	マリス・ヤンソンス
1989	カルロス・クライバー	2007	ズービン・メータ
1990	ズービン・メータ	2008	ジョルジュ・プレートル
1991	クラウディオ・アバド	2009	ダニエル・バレンボイム
1992	カルロス・クライバー	2010	ジョルジュ・プレートル
1993	リッカルド・ムーティ	2011	フランツ・ウェルザー＝メスト
1994	ローリン・マゼール	2012	マリス・ヤンソンス
1995	ズービン・メータ	2013	フランツ・ウェルザー＝メスト
1996	ローリン・マゼール	2014	ダニエル・バレンボイム
1997	リッカルド・ムーティ	2015	ズービン・メータ
1998	ズービン・メータ	2016	マリス・ヤンソンス
1999	ローリン・マゼール	2017	グスターボ・ドゥダメル

♪ シュトラウス一家

「ワルツの父」ヨハン・シュトラウス1世(1804-1849)とその息子3人—「ワルツ王」ことヨハン・シュトラウス2世(1825-1899)、ヨーゼフ・シュトラウス(1827-1870)、エドゥアルト・シュトラウス(1835-1916)の生み出した音楽は、作曲された当時から100年たった現在にいたるまで、ウィーンの人々の生活と切り離せない非常に身近な音楽として親しまれてきた。ヨハン・シュトラウス2世と同時代の作曲家であるブラームスもワーグナーもシュトラウスの作品をととても気に入っていたという。

♪ ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

1842年設立。国立歌劇場管弦楽団の団員によって構成され、1908年からは自主運営団体として活動しており、ニューイヤー・コンサートも含め、指揮者は楽団員たちが選んでいる。歴代首席指揮者には、マーラー、ヴァインガルトナー、フルトヴェングラーといった大指揮者が名をつらねるが、1933年のクレメンス・クラウスを最後に首席指揮者を置いていない。ウィーンの奏法を身につけた楽員が歌劇場所所有の楽器を用いて演奏することで、ウィーン・フィルならではの豊麗で優雅な響きが受け継がれている。

♪ クレメンス・クラウス(1893-1954)

1893年ウィーン生まれ。8歳でウィーン少年合唱団に入団。ウィーン音楽院卒業後指揮活動を開始。ウィーン国立歌劇場、ベルリン国立歌劇場などの総監督を歴任。1929年ザルツブルク音楽祭でヨハン・シュトラウスの作品だけのコンサートを開催して好評を博し、1933年まで同様の催しを行った。これがニューイヤー・コンサートの前身となったとされている。「ウィンナ・ワルツといえばクレメンス・クラウス」と言われ、優雅な風格を感じさせる演奏は他にはない洗練された演奏として後世の指揮者たちの目指すところとなった。

♪ ヴィリー・ボスコフスキー(1909-1991)

1909年ウィーン生まれのヴァイオリン奏者、指揮者。1932年ウィーン・フィルに入団し、39年よりコンサートマスター。1954年にクラウスが急死すると、翌年よりニューイヤー・コンサートの指揮をとった。ヴァイオリンを弾きながら指揮をする姿が、かつてのシュトラウス一家と同じスタイルであることから一世を風靡した。普段着のウィーン・フィルの姿が見えるような非常に朗らかな演奏が特徴。1979年まで25回もニューイヤー・コンサートを指揮し、一時代を築いた。

♪ 曲目紹介

1 喜歌劇「こうもり」序曲

作曲:ヨハン・シュトラウス2世 1873年

J.シュトラウス2世の最高傑作。物語の筋はたわいのないものだが、劇の構成と音楽のすばらしさが現在も人々を惹きつける。序曲では作品中の楽しい音楽が次々と接続曲風に登場する。ウィーンでは12月31日にオペレッタ全編が上演されるのが恒例行事となっており、翌日のニューイヤー・コンサートでも序曲が演奏されることが多い。

2 ワルツ「ウィーンの森の物語」op.325

作曲:ヨハン・シュトラウス2世 1868年

ヨハン2世は「わたしのすべての力はこの土に根ざし、わたしの耳がとらえた調べは、この空に満ちている。わたしの心がそれを聞き、手がそれを書き記しただけなのです。」と述べており、ウィーンの街と自然は彼の魂と創作のよりどころだった。オーストリアの民族楽器である「ツィター」を使用している。

3 ピチカート・ポルカ

作曲:ヨハン & ヨーゼフ・シュトラウス 1869年

ワルツの父・ヨハン1世の息子であるヨハン2世とヨゼフの兄弟が合作したポルカ。ピチカートとは弦楽器の弦を指で弾く奏法のこと。全曲を通じてピチカートのみで演奏される。ポルカは2拍子の舞踊曲。「常動曲」とともにクラウスがよくニューイヤー・コンサートで取り上げた曲。

4 ワルツ「わが人生は愛と喜び」op.263

作曲:ヨーゼフ・シュトラウス 1869年

ヨーゼフはヨハン2世の弟。兄よりも才能があるなどといわれたが、比較的若くして没した。この作品はヨーゼフの代表的なワルツ。ウィーンの大学生のために書かれた明るく朗らかで、人生の幸福に満ちた雰囲気のある作品。

5 かじ屋のポルカ op.269

作曲:ヨーゼフ・シュトラウス 1869年

原題“Feuerfest”は「耐火性抜群」を意味する金庫会社の宣伝文句。出荷2万個を祝って初演された。「かじ屋のポルカ」は日本での命名。打楽器奏者が金床を打ち鳴らす意表をついた趣向が人気。ウィーン・フィル 100周年記念の1942年ニューイヤー・コンサートでも演奏されている。

6 歌劇「騎士パスマン」チャルダッシュ・バレエ

作曲:ヨハン・シュトラウス2世 1892年

ヨハン2世の唯一の歌劇。相当な意気込みだったが、結果は燦々たるものだった。著名な評論家ハンスリックは、第3幕のバレエだけは「スコアの中で輝く宝石のような佳曲であり唯一の救いであった」と述べている。チャルダッシュはハンガリー・ジプシーの民俗音楽で、ヨハン2世はこのリズムをよく使用している。

7 常動曲 op.257

作曲:ヨハン・シュトラウス2世 1861年

庶民の音楽家ヨハン2世は、活気にあふれた産業革命の時代に敏感に対応し、ワルツ「音波」「電報」などの作品を書いている。この作品も当時流行していた言葉「常動(永久運動)」を音楽で表現した。繰り返して演奏でき、終わりもない。この録音では、譜面に書かれている1回分を演奏したあとクラウスが「And so on(このようにして続く)」と自らの声でこの曲を終わらせている。

8 爆発ポルカ op.43

作曲:ヨハン・シュトラウス2世 1847年

22歳の若きヨハン2世が作曲した愉快的なポルカ。当時ウィーンで流行していた爆竹を鳴らす遊びを取り入れたもの。1975年のニューイヤー・コンサートでは、最後の打楽器群の爆発音で「新年おめでとう！」の垂れ幕がするすると降りて、観客が大喜びするという趣向がこらされた。

9 アンネン・ポルカ op.117

作曲:ヨハン・シュトラウス2世 1852年

ヨハン2世が若さにまかせてもっとも多作だった1950年代初期の作品には見るべきものも多い。この曲は聖アンナ祭の前夜祭のために作られた。当時のウィーンの舞踏会のポルカには様々なリズムが含まれていたが、この曲はフランス風ポルカと呼ばれるゆるやかなポルカである。

10、12 ポルカ「うわ気心」op.319

作曲:ヨハン・シュトラウス2世 1867年

カーニバルの舞踏会のために作曲したギャロップ。1975年のコンサートではプログラムの一曲として演奏されたのに対し、1979年はアンコールで演奏されたこともあり浮き立つような楽しさを持っている。

11 ポルカ「狩り」op.373

作曲:ヨハン・シュトラウス2世 1875年

自身の喜歌劇「ウィーンのカリオストロ」に登場する音楽をもとに単独の舞曲曲に編曲したもの。疾走する馬の様子をギャロップのリズムに乗せ、鉄砲の音を加えて気分を盛り上げている。

13 ワルツ「美しく青きドナウ」op.314

作曲:ヨハン・シュトラウス2世 1867年

元はウィーン男声合唱協会の委嘱によりかかれた合唱曲。普墺戦争の敗北後の沈滞した空気から立ち直るため、当初の歌詞は「楽しくやろう!」といった雰囲気のものであった。1890年に現行の歌詞に改められ、今日まで「第二の国家」として親しまれている。

14 ラデツキー行進曲 op.228

作曲:ヨハン・シュトラウス1世 1848年

当時オーストリア領だった北イタリアでの独立運動を鎮圧したラデツキー將軍を讃えて作曲された。革命中のウィーンであったが、保守派も革命派も一緒になってこの曲とともに浮かれたという。現在のニューイヤー・コンサートでは最後に演奏されるのが定番となっている。

※曲目紹介は、鑑賞レコードの解説および p7 の参考文献を参考にしました。

♪ 鑑賞レコード

※末尾に[請求記号(資料番号)]を記載

※1 美しく青きドナウ! シュトラウス・ファミリー・コンサート第1集

クレメンス・クラウス指揮 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 録音年不明
LONDON MZ5023 [CLP10/267(42003384)]

※2 不滅のクレメンス・クラウス第1集

クレメンス・クラウス指揮 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 1952年録音
LONDON MR5031 [CLP10/272(42003418)]

※3 不滅のクレメンス・クラウス第2集

クレメンス・クラウス指揮 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 1953年録音
LONDON MR5232 [CLP10/273(42003426)]

※4 デジタル vs アナログ 1979年 & 1975年

ニュー・イヤー・コンサートの実況録音
ウィリー・ボスコフスキー指揮 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
LONDON GT9232 [CLP10/234(42002865)]

♪ 参考文献

※末尾に[請求記号(資料番号)]を記載

図書

標準音楽辞典 新訂第2版

音楽之友社 2008 [760.33/10A/1、2 相談室常置(22195168、22195176)]

新編音楽中辞典

海老澤敏ほか監修 音楽之友社 2002 [760.33/9 相談室常置(21465604)]

雑誌記事

特集ヨハン・シュトラウスとウィーン

山崎睦著『音楽の友』57(1) 1999.01. [Z760.5/2 書庫常置]

現代名盤鑑定団 124 ウィーン・フィル／ニューイヤー・コンサート

『レコード芸術』59(4) 2010.4. [Z769/13 書庫常置]

CD

シュトラウス・ファミリー・コンサート

クレメンス・クラウス指揮 キングレコード 1992 KICC6149/51 1950,1953 年録音
[CD10/シト 視聴覚資料室公開(41309246)]

Web サイト

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 web サイト

<http://www.wienerphilharmoniker.at/jp/new-years-concert/history>

日本ヨハン・シュトラウス協会 web サイト

http://www.5f.biglobe.ne.jp/~strauss/nyconcert/ny_top.htm

♪ 所蔵資料紹介

※末尾に[請求記号(資料番号)]を記載

レコード

※すべて書庫資料

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団・ニューイヤー・コンサート

クレメンス・クラウス指揮 PREISER RECORDS 1952 PR135031 [CLP10/271(42003467)]

不滅のクレメンス・クラウス第3集

クレメンス・クラウス指揮 1954 年録音 LONDON MR5033 [CLP10/274(42003442)]

ニュー・イヤー・コンサート: 1969年

ウィリー・ボスコフスキー指揮 LONDON SLA6325 [CLP10/M1578(40013617)]

ニュー・イヤー・コンサート: 1972年

ウィリー・ボスコフスキー指揮 LONDON SLA6328 [CLP10/232(42002816)]

ライブ・ニュー・イヤー・コンサート: 1975

ウィリー・ボスコフスキー指揮 LONDON SLA1078 [CLP10/233(42002824)]

ライブ・ニュー・イヤー・コンサート: 1979

ウィリー・ボスコフスキー指揮 LONDON SLE 1125/1126 [CLP10/252(42002600)]

CD ※すべて[請求記号 CD10/シト 公開]

シュトラウス・ファミリー・コンサート

クレメンス・クラウス指揮 キングレコード 1992 KICC6149/51 1950,1953 年録音
(41309246)

名指揮者とウィーン・フィルによるウィンナ・ワルツ集

エーリッヒ・クライバー、クレメンス・クラウス、ジョージ・セル、ブルーノ・ワルター、
ハンス・クナッパーツブッシュ指揮 PREISER RECORDS 1992 90139 (41318460)

カラヤン ニューイヤー・コンサート87

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮 Deutsche Grammophon F35G20123 (40107641)

ニューイヤー・コンサート1989 & 1992

カルロス・クライバー指揮 SONY CLASSICAL SICC204~206 (41325507)

ニューイヤー・コンサート2001

ニコラウス・アーノンクール指揮 WARNER MUSIC JAPAN WPCS-10650/10651(41117862)

※ニューイヤー・コンサートのCDは以降 2016 年まで所蔵あり

図書

ウィーン楽友協会二〇〇年の輝き 集英社新書ヴィジュアル版

オットー・ビーバ著 集英社 2013 [760.6/106 公開(22713671)]

ウィーン・フィルとともに ワルター・バリリ回想録

ワルター・バリリ著 音楽之友社 2012 [762.34/285 公開(22633481)]

*クラウス時代のウィーン・フィル・コンサートマスターによる回想録。

指揮者の役割 ヨーロッパ三大オーケストラ物語

中野雄著 新潮社 2011 [764.3/202 公開(22547301)]

ウィーン・フィル & ベルリン・フィル最新パーフェクト・ガイド Ontomo mook

音楽之友社 2008 [764.3/209 公開(22720387)]

ウィーン・フィルハーモニー その栄光と激動の日々

野村三郎著 中央公論新社 2002.11 [764.3LL/174 書庫(21551965)]

ヨハン・シュトラウス ワルツ王と落日のウィーン

小宮正安著 中央公論新社 2000 [762.34KK/117 書庫(21336961)]

ヨハン・シュトラウス 初めて明かされたワルツ王の栄光と波瀾の生涯

フランツ・エンドラー著 音楽之友社 1999 [762.34HH/103 書庫(21206727)]

シュトラウス・ファミリー ある音楽王朝の肖像

ピーター・ケンブ著 音楽之友社 1987 [762.4W/216 書庫(12659595)]